Graphic 1_WALL Hitotsubo next

第5回グラフィック「1_WALL」グランプリ

斉藤涼平 / Ryohei Saito

Grand Prize REPORT

第5回グラフィック「1_WALL」展
2011年8月22日(月)～ 9月15日(木)
公開最終審査
2011年9月2日(金) 6:00p.m.～8:30p.m.

“不条理系”アイロニーとユニークな展示方法が高く評価されてグランプリに！

絵を観た人を笑わせるために書かかれたシュールな線画をくるくると動かしながら見せるオリジナルな展示方法が好評価。批評性のある作風と技術の高さが個展への期待となり、グランプリ獲得に

受賞作　「ミニマルアート」

これ、気に入ったのなら俗に言う「アート」もしくは「グラフィック」、そうでないのなら「ゴミ」です。

審査員コメント

大塚いちお

良い意味で裏切ってくれる感じ、あやうい感じ、計算できない部分がある。ぎりぎりな感じが彼の最大の魅力。エネルギッシュな個展になりそう。

菊地敦己

アイロニーと批評性をもった作風に好感がもてる。展示の技術も高く、今回のファイナリスト6人の中ではもっとも意識的に作品を作っていた。観客の予想を裏切った個展を期待する。

高井薫

すごく好きな作品。ポートフォリオを見て爆笑した。“目的＝笑わせること”を設定し、クリアしている。その確信犯的なところがアートディレクター的だと思う。個展を見てみたい。

佐野研二郎

作品がとてもきわどいので、審査の時にもこれがどこまで作為的なのか議論になった。アートやデザインに対して批評性があり、美意識もしっかりあると思う。ポートフォリオよりも展示の方が◎。今まで見たことがない見せ方で、ベストアンサーだと思った。

室賀清徳

娯楽性と外連味の周到なバランスが小気味よい展示だった。勢いまかせのようでいて、作品全体のメディア性が入念に考えられていたのが印象的。半年先、1年先がどうなるか分からないけれど、すごく気になる。個展を見てみたい。

斉藤涼平　Ryohei Saito

1983年生まれ
神奈川県横浜市出身
http://saitoryohei.com

FINALISTS ※五十音順

Aokid
及川さとみ
大河原健太郎
河野裕麻
斉藤涼平
タカスカナツミ

JUDGES ※五十音順、敬称略

大塚いちお(イラストレーター・アートディレクター)
菊地敦己(アートディレクター)
佐野研二郎(アートディレクター)
高井薫(アートディレクター)
室賀清徳(『アイデア』編集長)

NEXT 公開最終審査 REPORT

FINALISTS

■出品者のプレゼンテーションと質疑応答の概略

大河原健太郎　Kentaro Okawara

「H2O と神」

日々の経験や感動、無意識な出来事などから生まれるもの。それは、今の自分自身の老廃物であり、日常でもある。それらが集まって様々な要素がつながり、日常を神秘的にしている。そんな、人間が生み出す果てしない想像力を感じてほしい。それを創り出したい。

〈質疑応答〉

●菅沼：いろんな手法で描かれた作品が展示されているが？

○大河原：スタイルにはこだわっていない。出来上がったものすべてが自分の手法だと思う。1点1点はもちろん大切だが、空間全体を感じてもらいたい。

●菊地：絵自体は達者だが、「神」がテーマだと言うわりにはモチーフも新鮮でなく独自の世界観を感じないが？

○大河原：日常にある「水」と、日常を超える存在である「神」を意識して描いた。

タカスカナツミ　Natsumi Takasuka

「リュックに食パンに鼻歌に、ゆがんだ星屑を拾って泳ぐ」

日常をテーマに作品をつくっている。ある時、やるべきことが多すぎて頭の中がいっぱいになり、それをA4の紙に言葉として吐き出した。その言葉は私にとって重要なものに思え、そこからイメージすることをかたちにしている。見る人に共感してもらえたらいいと思う。

〈質疑応答〉

●大塚：ポートフォリオでは面白かったのに、展示では見る人と作品との距離感がよくなかった？

○タカスカ：展示は失敗したかも。本1冊のみの展示など工夫すれば良かった。

●佐野：二次審査では他の人の作品と違った空気感があって好きだったのに、文字と絵のバランスがもったいないよね？

○タカスカ：立体物を展示するか、グラフィックとして展示するか迷って、この展示になった。反省点は今後に生かしたい。

河野裕麻　Yuma Kawano

「わたしたちの標本」

河野裕麻　「わたしたちの標本」

生きていく上で避けられない出来事に対し、いろんな情報や噂に惑わされずに自分の気持ちやインスピレーションを信じて行動することが大事だと思う。それが私の作品のテーマ。眼に映るすべてが真実ではなく、鑑賞者にとって本当の意味での真実を問いかけたい。

〈質疑応答〉

●佐野：作品全体を通して物語はあるのか？　なぜ、夜の絵を描いたの？

○河野：人物などモチーフの一つ一つに物語は存在する。夜のほうがミステリアスだから。

●高井：作品の中であなた自身にとっての真実ってどの部分？

○河野：鑑賞者にとっての真実を問いかける作品なので、私の真実は答えられない。

及川さとみ　Satomi Oikawa

「山 ヤマガタヤマ」

住んでいる山形の風景にインスピレーションを受け、山形の山をモチーフにしたオリジナルな山を、集めたチラシや新聞をコラージュして制作した。この作品はこれが完成形ではなく、もっと裾野をどんどん制作して、広げていきたいと思っている。

〈質疑応答〉

●室賀：壁の前に設置された手作りスタンプがメディアアート性を高めているように見えた。木彫りの熊パンダも深読みを誘うが、実際の位置づけは？

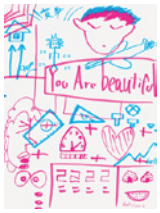
○及川：山から生まれた熊パンダ。壁と台に置いてあるものとで意味に違いはないです。

●佐野：コラージュに使うためのちらしをすごい量ストックしているわけでしょ？　ケーキの写真ってそんなにないよね？

○及川：その時期ごとに集めている。ケーキはクリスマスに。さくらんぼは6月に。

Aokid

「Yes.This isn't 紙しばい。and come on.」



――審査員の前で審査会場を駆け回りながらパフォーマンスを披露――　演壇に立って～僕なりのコンテンポラリー紙芝居をやります～自身の作品を手に持って、独自の登場人物になりきって即興でセリフを連発。～いいじゃない、なんか楽しくて体が動いちゃっても。

〈質疑応答〉

●大塚：いま披露してくれたパフォーマンスは即興なの？

○Aokid：かなり即興。空間やお客さん、その日のコンディションも含めてインスピレーションで動いている。

●菊地：絵とパフォーマンスの関係は？

○Aokid：そのすべてが作品。絵を描きながらパフォーマンスをするときもある。

斉藤涼平　Ryohei Saito

「ミニマルアート」

僕の絵を観た人を笑わせたい。例えば牛乳を口に含んでいる人が吐き出すような種類の笑いを引き起こしたくて絵を描いている。一方、展示は奇をてらったのではなく、絵をちゃんと観てもらいたいと思い、かなりの労力を費やした。装置の摩擦や強度などもしっかり考えた。

〈質疑応答〉

●佐野：トイレットペーパーのような見せ方はベストアンサーだと思う。どこかで見たの？

○斉藤：いや、他で見たことがあったら絶対にやってない。

●大塚：調子の悪いときでもこういう絵はいくらでも描けるのか？

○斉藤：調子はいいッス。今回の展示作品はポートフォリオにはなかったものばかり。

●室賀：ロールする展示方法もネタも面白いが、壁に落書きしているところも面白かった。

Graphic 1_WALL

■審査員の感想

進行の菅沼さんが各審査員に全体的な感想を聞いた。佐野さん:「これまでの経験から審査の過程でそれぞれの作品に対する評価が自分の中で変化する。そんな“揺れ幅”が今回は特に大きくて面白かった。審査員みんなの意見がバラバラになりそうで楽しみ」。大塚さん:「ファイナリスト6人を選ぶときにバラバラな作品がいいと思い選んだが、それぞれにくすぐられる部分が違う。それぞれの良さがある中でどの作品を推すかは難しい判断になる」。高井さん:「フライヤーが出来上がった時、会場で展示を見た時、プレゼンテーションを聞いた時、その都度いいなと思ったりガッカリしたりした。だから、この後のディスカッションも楽しみ」。菊地さん:「全員に言えることだが、ひとつの作品で語れる人がいなかったのが　残念。一点の強さを作ることの難しさを感じる。みんな礼儀正しくて、反抗心が足りないように感じる。みんな普通に礼儀正しいが、反抗心が足りない」。室賀さん:「いま、グラフィックとは、というところに立ち帰って自分なりにグラフィック表現を考えてみたい。ネットなどこれだけ多数のメディアがある中、落としどころの素材やマチエールには相当の決断があるのだろうと思ったが、あまり根拠が感じられなかったのが気になる」。

続いて出品者一人ひとりについての感想を聞いた。○大河原さんの作品について。大塚さん:「大河原さんの絵は好き。展示会場内ではすごいエネルギーを感じたが、その反面、“神”という壮大なテーマを掲げたぶん、そこに至っていないもどかしさもある」。佐野さん:「あっさりした作品が多い中で、盛りだくさんで暑苦しい絵が逆に目を引いた。エネルギーは感じるが、どこが良いのか言葉にしにくい作品」。高井さん:「圧倒的に上手い人としてファイナリストの6人に選んだ。ポートフォリオで見た時は魅力的な絵だったが、展示では良さが見えなくなっている」。○河野さんの作品について。菊地さん:「一見いまどきの少女画だが、ちゃんと個性をもったファンタジーが描かれている。ちょっと気まじめに過ぎる感はあるが、素直な絵の魅力がある」。佐野さん:「わざと絵のピースを外した展示にしているが、鑑賞者がその部分を見てみたいと思う仕掛けがない」。高井さん:「河野さんの絵が『1_WALL』に選ばれることは意義のあること。“山”と“夜”というテーマに縛られ過ぎてしまったのは残念」。室賀さん:「絵巻的な世界観など、絵そのものが持つポテンシャルや面白さを感じる」。○Aokidさんの作品について。大塚さん:「ポートフォリオは大好きだった。見ているこちらが気になる作品。この6人の中では将来的に良くなる可能性はある」。高井さん:「好きな絵で、パフォーマンスも面白かった。“紙芝居”を楽しみにしていたが、今日はアウェー感のせいか不完全燃焼かな」。室賀さん:「パフォーマンスを楽しみにしてきたが、ちょっと残念。でも身体的なアプローチも含めてポテンシャルは感じられた」。菊地さん:「ドローイングとパフォーマンスが一体になって、はじめて成立する作品。面白くなる感触はあるが、全体的に技術が足りていない」。○タカスカさんの作品について。大塚さん:「もともと持っている彼女のセンスの良さをすごく感じる作品」。佐野さん:「ポートフォリオから良いなと思っていたが、今回の展示を見てガッカリした。しかし展示は失敗しても評価をさげるのはもったいない作品。すごく可能性を感じる人」。室賀さん:「ポートフォリオで見た時から完成度が高かった。言葉の選び方や絵の作り方はうまいので、一冊の本をつくるような展示でも良かったかも」。高井さん:「ポートフォリオの魅力はすごく感じる。展示をどうしていったらいいかは難しい」。○及川さんの作品について。大塚さん:「一次審査から『何だこれ！』と感じていた作品。最終的にユーモアのある作品になって魅力を感じる」。室賀さん:「戦後日本に伏流するコラージュ志向のマグマが噴き出したようでもある。いろいろ提起してくれる」。菊地さん:「手法もイメージも新しさは感じない。だが独特な空気感を持っているので、今後どういう作品をつくっていくのか興味がある」。佐野さん:「展示作品を見ると、かなり計算されていてユーモアのセンスがある。個展になったら魅力的かも。好きな作品」。○斉藤さんの作品について。菊地さん:「今回のファイナリスト6人の中では一番技術が高く、安心して個展を任せられる人だと思う。唯一、批評性をもった作品」。大塚さん:「良い意味で裏切ってくれる感じ、あやうい感じといった計算できない部分を評価すべきかどうか迷う作品でもある」。高井さん:「すごく好きな作品。シーンと静かなところでポートフォリオを見て爆笑してしまった。“目的=人を笑わせること”をちゃんとクリアしているのがいい。しかし、それがグランプリにふさわしかという迷いもある」。室賀さん:「不条理な笑いだが、安心できる面白さがある」。

■審査員による投票

ここで各審査員にグランプリ候補を2名選んでもらった。結果は……

大塚／タカスカ　及川
菊地／河野　斉藤
佐野／タカスカ　斉藤
高井／河野　Aokid
室賀／タカスカ　斉藤

これを集計すると、タカスカ3票／斉藤3票／河野2票／Aokid 1票／及川1票

タカスカさんと斉藤さんが3票ずつを獲得。菊地さんから「河野さんも含めて議論してはどうか」との発言もあったが、他の審査員からは河野さんを推す声がなく、グランプリ候補はタカスカさんと斉藤さんに絞られる。ここで5人の審査員に二人のうちどちらをグランプリに推すか挙手をしてもらった。結果は、タカスカさんが大塚さんと佐野さんの2票。斉藤さんが菊地さん、高井さん、室賀さんの3票となったが、最後に各審査員に応援演説をしてもらう。佐野さん:「二人とも魅力的なので最初は両方に票を入れたが、タカスカさんの“つぶやき作品”が会場に散りばめられていると幸せな気持ちになりそうで、みんなの共感を誘うと思う。タカスカさんを推したい」。室賀さん:「タカスカさんは完成されていると思うので、斉藤さんの個展を見てみたい」。高井さん:「どちらの展示も見てみたいが、不条理系の空間の斉藤さん」。大塚さん:「斉藤さんはエネルギッシュな展示になりそう。一方、タカスカさんの“つぶやき作品”は等身大の表現でストレスなく見られる。そんな素直な作品を推したい」。菊地さん:「タカスカさんは、すごくセンスは良いと思うけど、ディテールの技術が少し足りないと思う。だから斉藤さんを推したい」。全員の応援演説が終わり、いよいよ最終投票へ。結果は、大塚さんと佐野さんが票を投じたタカスカさんを、菊地さん、高井さん、室賀さんの3人が投票した斉藤さんが最初の挙手と同じく上回った。その瞬間、「第5回グラフィック『1_WALL』のグランプリは斉藤涼平さんに決定！」と菅沼さんが宣言。3時間40分という異例の長時間にわたる公開審査が修了した。

■出品者インタビュー

大河原健太郎さん
公開審査を通して、テーマがすごく大事だと思いました。自分のテーマは大きくて答えが見つからないのもわかっていたけど、プレゼンテーションでそこを強調し過ぎましたね。

河野裕麻さん
この結果が今の自分の実力だと思っています。ファイナリストの6人に残ったことは自信になったし、今日の審査員の方たちを後悔させるくらいに、もっと頑張ろうと思いました。

Aokidさん
議論を聞きながら自分のことを考えるのは苦しかったのですが、楽しい時間でもありました。「甘えるな」という言葉が身にしみました。次のパフォーマンスに期待してください。

タカスカナツミさん
決戦投票で次点に終わったけど、今はスッキリしています。これまで実物展示ばかりしてきましたが、「1_WALL」で初めて平面の展示にチャレンジできたのは良かったと思います。

及川さとみさん
秘かにグランプリを狙っていましたが残念でした。でも、公開審査ということで審査過程を見聞きできて結果には納得しています。今はむしろ、すがすがしい気持ちですね。

斉藤涼平さん
グランプリ獲得の自信はありました。でも、最後までヒヤヒヤでした。グランプリという責任感を背負って、この一年間を一所懸命に頑張っていきます。ありがとうございます。

<文中一部敬称略　取材・文／田尻英二>

■お問い合わせ先
株式会社リクルート　ガーディアン・ガーデン
〒104-0061　東京都中央区銀座7-3-5　リクルートGINZA7ビルB1F
TEL:03-5568-8818　FAX:03-5568-0512
HP:http//rcc.recruit.co.jp　twitter:@guardiangarden

Guardian Garden
PRODUCED BY RECRUIT